八戸地域防災協会視察研修

会報 防災だより

2014
VOL.12
3月31日発行

CONTENTS

1．ご　挨　拶 …… 会長　大　黒　裕　明　2P
2．東日本大震災被災地視察研修 …… 2P
3．災害時要援護者支援事業 …… 4P
4．住宅防火防災推進シンポジウムin八戸（共催） …… 5P
5．防災士研修講座 …… 6P
6．全体研修会 …… 6P
7．各署ブロック活動報告 …… 7P
8．福岡市の診療所火災を教訓に …… 7P
9．趣味をもとう …… 齊　藤　　浩　8P
10．会員事業所紹介コーナー …… 株式会社　柏崎組　8P

題字揮毫　大黒会長

発行所●八戸地域防災協会　事務局●消防本部予防課内　八戸市大字田向字松ケ崎７の８　☎(0178)44－2133

ご挨拶

八戸地域防災協会
会長 大黒裕明

日頃は当協会の活動にご理解とご協力を頂きありがとうございます。防災だより12号をお届けします。

東日本大震災から三年が経過しました。八戸では港湾の完全復旧宣言もなされ、さらに復興へと未来を目指してのまちづくりが進みつつありますが、陸中や陸前ではまだ先が見えないという状況の地域もたくさん残っています。当協会ではその現実を自分たちの目で確かめようと、昨年秋、被災四地域を視察しました。街並みが戻りつつあるところも無くは無かったですが、瓦礫こそ凡そ撤去されたものの住宅や工場の建ち並んでいた道路沿いが未だに原野状態と言うところが殆どで、見ていてやるせない気持ちにさせられたのは私だけではなかったと存じます。

特に田老町では、万里の長城とも言われ、あるいは過剰設備ではないのかと陰口を叩かれたほどの堤防が破られたのを見ると、どこまでやっても絶対ということはあり得ないと思い知らされました。八戸でも海岸線沿いに堤防をめぐらそうという構想があります。これに代わる案を私は持ち合わせませんが、その効果には疑問が消えず、何もやらないと非難されるかもやる、という姿勢を強く感じるのは捻くれているからでしょうか。

自然災害への対応が大変なのに、悪意を持って火災を引き起こそうとする人がいるのは困ったものです。昨年からの林野火災、今年に入ってからは家屋でも不審火が起こり、不安が募ります。他人の不幸を見て楽しむ、人間は完全ではありませんからそんな不埒が起こることもあるのでしょうが、身を戒めてほしいと、ただ願うばかりです。私たちの活動は、もちろんそれぞれの属する事業所の防災を進めるのが第一ですが、同時にまだ協会に加わっていらっしゃらない事業所の方や、また一般の方および将来地域を背負うであろう若い人たちにも防災意識を高めていただくことにも努めなければなりません。活動に到達点は無く、高いレベルを長く維持し続けることが大切です。

今後とも、当協会の活動にご理解・ご指導・ご協力をお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

東日本大震災被災地視察研修

財団医療法人 謙昌会
総合リハビリ美保野病院
武沼 潤

昨年11月14日・15日の二日間、八戸地域防災協会主催の研修に参加しました。目的は東日本大震災による被災地の視察と支援。日程は八戸消防本部前から二十数名が大型バスで出発し、海岸沿いに津波の被害と復興の状況を視察しながら国道45号線を南下して大槌で一泊。二日目は釜石から遠野へ抜けて東北自動車道経由で八戸へ戻りました。

あの震災からまもなく3年が経過しようとしています。震災直後は勤務先でライフラインが復旧するまで施設の機能を維持するための対応に追われ、沿岸地域の惨状は断片的にテレビや新聞で見ただけでした。その後、八戸・洋野・久慈付近は列車や車の窓から見ることはありましたが、今思えば自分はたまたま難を逃れたのをいいことに、見たくない物から恐ろしくて目をそむけていた感があります。以前はよく近郊の岸壁で夜釣りを楽しんでいましたが、震災後は全く遠ざかっていました。

今回の研修では、実際に自分の足で被災地の中に立ち、被害にあった方々の生の声を聞く機会を頂きました。田老では1階2階が鉄骨だけになっても建っているホテルの6階で、湾の入り口から入ってきた津波が、町を飲み込みながら凄まじい勢いでホテルへ襲いかかってくる映像を見せて頂きました。また市街地を守るために破壊された防潮堤のそばで、現地ガイドさんから悲惨な体験談を聞かせて頂きました。防潮堤が守ろうとした市街地は瓦礫の撤去こそ終わっていましたが更地のままで、仮設住宅があるだけに見えました。田老地区は過去何度も悲惨な津波の被害を受けたため、万里の長城と呼ばれる高さ10メートルの当時世界一の防潮堤を築きまし

田老観光ホテル

た。そしてそれを過信することなく、防潮堤は避難するまでの時間稼ぎの為の物と考えて、高台に避難場所を設けて避難経路を整備し、毎年避難訓練も続け、「津波防災の町」を宣言していました。それでも大きな被害を受けたのです。備えがなければ更に被害は大きかったと思われます。

災害はいつか必ず起こります。油断すれば全てを奪われる事もあるでしょう。備えていても被害はあるでしょう。それでも地震や火事、風水害だけでなく、事故や病気等人間にダメージを与える様々な災いに対して普段から備える事の大切さを考えさせてもらえた研修の旅であったと感じました。八戸地域防災協会の研修には初めて参加しましたが、二日間皆様と寝食を共にしたことで、初対面の方々とも親睦を深める事が出来、色々と教えて頂けた事も大きな収穫だと思っています。

防波堤から見た田老観光ホテル

八戸スカイビル　株式会社

小川　寛

去る平成25年11月14日から15日の2日間、宮古・釜石の被災状況視察研修に参加させていただきました。今回の視察研修で最も強い印象を受けた宮古観光協会様主催の田老地区「学ぶ震災ツアー」では、語り部ガイドさんの防災に対する熱あふれる解説を拝聴し、防災担当の一員として普段からの防災意識を深めることの必要性および重要性をあらためて認識させられました。語り部ガイドさんが自らの凄惨な被災体験を交えながら何十・何百回と人の心に訴えて来られたと思うと胸が熱くなりました。後日このツアーは予約がたいへん多く、多方面から注目されていると聞きさもあろうとひとりうなずいている次第です。

田老観光ホテルでの被災映像視聴

さて、被災前の宮古市田老地区の防波堤は、当初は高さ10m、延長1350m、築造期間24年、V型で建造され海から来た波を側方に受け流す設計と聞きます。後に凸部を支点に防波堤を延長してX型、総延長2433mの〝万里の長城〟と呼ばれる世界最大規模の防波堤へと変貌しました。この間、田老町の皆さんの協力のもとに、防災市街地へと碁盤目状の道路、交差点の隅切り、7haの防災林等々が整備され、また避難対策や過去数回あった三陸津波の惨禍と教訓を語り継ぐシステムも整い、海外からも災害の町から防災の町として注目されるようになって、この地区の防災はハード・ソフトともに充実されていたと伺っていました。しかし、東日本大震災の津波はX型防波堤の防潮堤部分を破壊、入型に変形させながら田老地区全域に浸水、浸水地域のほぼ全家屋が破壊されてしまいました。現在は瓦礫の撤去が進み以前見え隠れしていた海岸線と残った防波堤や防潮堤の残骸が露わとなりました。聞くところによると、当初の津波警報で高さ3mと報道されたあと、すぐ全域が停電して最新情報が得られず尊い命を守れなかった方々がいるとの事まことに残念であり、計り知れぬ自然の脅威と防災の難しさを思い知らされました。そのとき、語り部ガイドさんが話してくれました「世界最大級の建造物は突破されたものの津波の浸入速度を遅らせ、また引波による外海への流失を防止した点は注目すべきだ」と。昨年をみると、国内は各地方でたて続けに起きた記録的な土砂災害、海外では2月のロシアの隕石落下、10月のフィリピン・レイテ島の台風による気象津波など世界的に自然災害が増加しています。また交通・輸送機関、化学工場などの人為災害も現実に起きています。人はこれらの災害とその可能性に向かって、災害をどう予防し回避し減少させるのか、災害からどう離脱し救助するのか、常にさらなる準備と訓練を怠らず災害を皆無・最小に抑えることに邁進しなければならない。この研修でそんなことをあらためて深く考えさせられました。私が勤めるチーノはちのへは、文化創造を愛する市民の皆様が出資して実現した八戸唯一の映画館をはじめ大小様々なテナントとさらに最上階のITフロアには

田老町の防波堤にて

ＩＴ界を爆走する企業および新しいサービスを創造展開する企業が入居していて、幅広い年齢層のご来客様とともに次世代を牽引する多くの人材が活躍しています。我が社の防火防災訓練ではこれらテナントから毎回２５０人以上が参加し毎回異なる原因の災害と避難経路を設定していますが、避難時間は回を重ねる毎に短縮できました。勿論単に避難時間の短縮が最善ということでなく、災害の原因・状況に応じた避難経路と避難口の選択に対する意識を深めることも重要と考えます。当館内の陳列棚等の位置・配置などの変更を把握すること、時間帯毎の誘導等責任者を設置し周知すること、等々課題もまだまだあります。また、中心街の防災拠点との連携をいっそう強め避難場所及び情報の共有発信等についても地域防災に資するよう努めることも重要と思います。田老では高台の造成工事が進み新しい町造りでかつての景観が変わりつつある中で、研修中に訪れた浄土ヶ浜は地名がついてから３００年その名の由来どおり変わらぬであろう景観が印象的でした。この景観とともに研修で得たものが褪せぬよう胸に刻みます。

終わりに、今回の研修を通じて普段おつきあいのない方々と同席させていただき緊張いたしましたが、極めて有意義な交流をくださり厚くお礼申し上げます。加えて、このような貴重な経験の機会をくださいました八戸地域防災協会および事務局皆様に心より感謝申し上げます。

事務局から

お忙しいところ、各コーナーにご寄稿下さいました皆様、ありがとうございました。

会員事業所の皆様につきましては、今後寄稿依頼があった際は快くお引き受けいただければ助かります。

併せて、「趣味をもとう」、「会員事業所紹介コーナー」へご寄稿いただける方がいらっしゃいましたら事務局までご連絡願います。

また、協会事業の一つであります「防災士養成事業」への希望者も募集しております。人数に限りがありますので、こちらも事務局までご一報下さい。

【事務局】八戸消防本部予防課内
☎　０１７８－４４－２１３３

災害時要援護者支援事業

昨年11月20日（水）から22日（金）までの３日間、各市町担当課、八戸電気工事業協同組合、協同組合八戸管工事協会、㈱ユアテック八戸営業所の協力のもと、八戸消防本部と合同で高齢者世帯、障害者世帯などに住宅用火災警報器の寄贈・設置事業を実施しました。

今年度は、八戸市、五戸町、おいらせ町の77世帯に対し、住宅用火災警報器（計89個）の寄贈設置、更に火気使用機器及び水まわりの点検整備と併せて、たこ足配線や火気取扱いなどの注意を呼びかけました。

この活動は、社会福祉事業の一環として実施しており、住宅火災から高齢者などの災害時要援護者の犠牲を減らし、安全で暮らしやすい日常生活の維持に寄与するとともに、災害のない明るい街づくりの推進を目的としています。

来年度以降も、計画的に実施する予定ですので、会員皆様のご協力をお願いいたします。

住宅防火防災推進シンポジウム in八戸 開催！

〝一緒に考えよう！地域の住宅防火防災対策〟をテーマに、平成25年10月15日（火）、八戸市公会堂大ホールにおいて「住宅防火防災推進シンポジウムin 八戸」が開催されました。

このシンポジウムは、本テーマを基に地域一体となった住宅防火防災対策を、出演者と出席者が共に考えて行こうという趣旨で行われたものです。

主催は総務省消防庁で、当協会と八戸広域消防本部、三八地区消防協会、住宅防火対策推進協議会が共催となり、地域の防災関係者や自主防災組織、また一般住民など、当日は約５００名が会場に集いました。

プログラムでは、第１部として行われた東京理科大学総合研究機構　菅原教授の「基調講演」を皮切りに、第２部として、山形弁研究家でタレントのダニエル・カールさんが、八戸地域女性消防クラブ協議会の奥田副会長、五戸町消防団女性班田中班長と消防本部の田端予防課長を交えてトークショー「ダニエル・カールの防災がんばっぺ」を行い、地域の防災活動状況や取組みなどを紹介しました。

そして最後に行われた第３部「パネルディスカッション」には、当協会の大黒会長もパネリストとして出席し、協会の成り立ちや活動状況、また今後の展望について紹介しました。

その他、パネリストとして、総務省消防庁福井予防課長補佐、ダニエル・カールさんに、地元防災関係機関として三八地区消防協会木村会長（八戸市消防団長）、八戸広域消防本部の細越次長が出演し、コーディネーターを勤める菅原教授の進行の下、様々な意見を交換いたしました。

山形弁で自身の防災活動体験を語るダニエルさんの軽妙なトークは、観衆を大いに沸かせておりました。

観客の多くは、タレントのダニエル・カールさんを目当てに来て下さったようでした。

午後1時30分から始まったシンポジウム。会場の熱気と笑いの中で進行され、午後4時に予定どおり終了しました。

終了後、自身の人気にご満悦のダニエルさんを囲んで記念撮影等を行える予定でしたが、台風の北上により彼は新幹線の予定を早めての帰京を余儀なくされ、泣く泣く会場を後にしたのでした。

忙しい中、当日会場にお越しいただいた会員の皆様、お疲れさまでした。

挨拶をのべる消防長

消防庁予防課課長補佐　福井武夫氏

パネルディスカッションの様子

「ぼうさい、がんばっぺ～!!」

防災士研修講座

「防災士研修講座を受講して」

株式会社ユニバース
ＣＳＲ部
白浜　聡

昨年の10月5日・6日の2日間に亘り、盛岡市にて、防災士研修センター主催の「防災士研修講座」を受講させていただきました。

研修の内容は大きく3つに分かれており、2日間の中で、災害や防災知識に関する座学が10時間、ハザードマップの作成や避難所の開設・運営に関する実習が4時間、筆記による資格試験が1時間という構成で実施されました。

現在、私は災害対策に関係する業務に携わり、平時の備えと緊急時対応としての事業継続計画やマニュアルの整備、自治体との災害協定の締結、支援物資の備蓄などの業務を担当しています。

そして、3．11の大震災では、色々な方々にご支援・ご協力をいただき、八戸市や青森県などの自治体と連携して支援物資をお届けすることや、弊社の店舗も、津波で被害を受けた岩手県宮古市や久慈地区の避難所を訪問し、炊出し等を実施させていただくことができました。

今回の研修では、当時の状況を振り返りながら、「自助」「共助」「公助」の観点から、会社として、また、災害対策の担当者として果たすべき役割を改めて考えることができ、とても有意義な時間だったと感じています。

平時の備えを充実させることは、自社が災害で受けるダメージを減らし、より速やかな営業の再開と継続を可能にします。そして、結果的には、地域の皆様への貢献（共助・公助）に結びつくという流れを再確認することができました。

今後も、本講座で得た学びと経験を業務に生かし、平時の備えの充実と、災害発生時に被害を最小限に止めるための、緊急時の態勢づくりに取り組んでまいります。

末筆になりましたが、本研修を受講する機会をいただいた八戸地域防災協会様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

「防災士研修講座を受講して」

社会福祉法人
やすらぎ会
ケアホームやすらぎ
和田　太一郎

防災士という資格を知ったのは、大変失礼ですが今回の「防災士研修講座」の案内を頂いた際に知りました。2011年3月11日の東日本大震災を経験し、日本中で防災意識が高まっている昨今、自分ができる事は何か?を学ぶことが出来れば、今後の生活、職場での対応などで役立つと思い受講しました。

教本や研修講座では難しい言葉や専門用語が並びますが、根本には「災害時に適切な行動と判断をし、被害を最小限に食い止める為にはどうするか」を考える事が柱になります。そして、「自助・共助・公助」が災害時の合言葉になります。その他にも、講師の方々の地震や災害のメカニズムの研究発表等もあり、とても充実した内容でした。

東日本大震災が起きた時刻、私は施設の厨房で夕食の準備中でした。電気・ガス・水道が使えない中、カセットコンロでご飯を炊き、ペットボトルの飲料水で味噌汁を作り、主菜は缶詰を使い、懐中電灯で照らしながら盛り付けをしました。大きなホールでは、発電機の大きな音と僅かな光、ラジオから流れるニュースに耳を傾け、寄り添い寒を凌ぐ利用者と、慌ただしく走る職員の姿がありました。この非常事態の中で、食事の時間だけ不安な表情が少しだけ安堵表情に変わりました。温かい食事を食べられる安心感はとても大きなもので、どれほど精神面に影響を与えるのかを実感しました。

研修講座では、避難誘導から避難所設営・運営の流れや、二次災害の防止を考える「ハザードマップと災害図上訓練」と「避難と避難行動・避難所開設と運営」という模擬演習があり、季節や発生時刻、避難場所等に応じて、適切な行動や対応をグループ内で意見交換をしながら進めていく中で、新しい発見や正解を導き出す作業はとても有意義なものでありました。

現在、障がい者専用の共同生活介護施設で世話人として働き、利用者の健康管理や食事提供、日々の生活のサポートをしている立場として、災害時の利用者の身の安全を守る事も重要になります。施設に入居している方は、健常者の様に簡単に避難することが出来ません。避難をスムーズに完了させる為には、職員の防災知識の強化と、利用者個人への避難経路の周知と訓練にかかっています。

災害はいつ起きるか分かりません。自分の身は自分で守り（自助）、近隣住民と助け合い（共助）、公共団体と協力しあって（公助）、二次災害の防止に努めることが防災士の役割であり、その為には日頃から備えておく必要があります。しかし、いくら危機管理体制を整えておいても、災害時に機能するかは分かりません。誰が責任者だとか、誰が出来る出来ないの話ではなく、個人個人が防災意識を高め、知識を得ていく必要があり、防災士は得た知識を広げていくのも役割だと思います。

防災士研修講座で学んだことを忘れずに、安心して暮らして頂けるように、職場の危機管理体制の強化と、地域の防災に役立てるように努力していきたいと思います。

今回、防災士養成講座に参加する機会を与えて頂きました、八戸地域防災協会の方々に深く感謝申し上げます。

全体研修会

平成25年12月6日㈮、八戸パークホテルにおいて、『大地 球 氏』（株式会社ビーエフエム）を講師に招いて全体研修会を実施しました。

大地球氏の落語は、一年の苦楽を締めくくるべく、巧みかつ、迫力のある語り口で、聴講した協会員全員が心から笑い、温かい気持ちにさせていただきました。研修会の後は、同会場で懇親会を開催し、昨年中の労をねぎらうとともに会員相互の親睦を図りました。

各消防署ブロック主催事業

◆八戸消防署ブロック

平成25年9月19日㈭、八戸福祉体育館において、「第6回活動交流会」を実施、競技形式で防火管理体制の充実強化及び自衛消防活動の技術向上と併せて会員相互の親睦を図った。

◆八戸東消防署ブロック

平成25年10月2日㈬、東北電力㈱八戸火力発電所において、来年度から運転を開始するコンバインドサイクル発電設備を中心に視察、環境保全対策等について研修を実施。

◆三戸消防署ブロック

平成25年9月12日㈭、東北電力㈱八戸火力発電所において、メガソーラー施設を中心に視察、太陽光発電の仕組み、メリット及びデメリットの他、再生可能エネルギーについて研修を実施。

◆五戸消防署ブロック

平成25年9月27日㈮、八戸市立市民病院において、Dr.ヘリ施設及びDr.カーを視察、Dr.ヘリ及びDr.カーによる現場からの早期治療の重要性と救命率の向上について研修を実施。

◆おいらせ消防署ブロック

平成25年8月9日㈮、航空自衛隊三沢基地及びむつ小川原石油備蓄㈱を視察し、三沢基地においては基地の概要、震災時における活動について、むつ小川原石油備蓄施設においては施設の概要、防災危機管理体制について研修を実施。

福岡市の診療所火災を教訓に

平成25年10月11日㈮午前2時過ぎ、福岡市博多区の整形外科医院で発生した火災は、入院患者など10人が死亡する大惨事になりました。

もう一度状況を確認し、各事業所の防火管理対策等に生かせる点がないか考えてみたいと思います。

1　発生日時　10月11日㈮　2時10分頃（鎮火4時56分）

2　構造規模　鉄筋コンクリート造　地上4階、地下1階

3　用　　途　診療所　6項イ（地下1階～2階診療所　3階 住居　4階 看護師寮）

4　消防設備　消火器、屋内消火栓設備（任意設置）、自動火災報知設備、避難器具、誘導灯

5　出火原因　1階処置室から出火。加温器（医療機器）の電源プラグのショートとみられる。

6　焼損程度　全焼（焼損床面積282㎡）

7　死　　者　10人（入院患者8人、病院関係者2人）

8　負 傷 者　5人（病院関係者1人）

自衛消防活動	
発見・通報状況	当直看護師が2階の病室で患者の世話をしている時に自動火災報知設備のベルが鳴り、異臭が発生し始めた。2階厨房や病室を見回った後、3、4階に行き、最後に1階に降りて火災を発見した。 通報は、屋外に避難した当直看護師からの依頼を受けたタクシー運転手が実施した。
初期消火の状況	屋内消火栓及び消火器が設置されているが、実施された形跡なし。
避難誘導等の状況	当直看護師は1人であり、ほとんど行われなかった模様。
防火区画の状況	各階に設置されている防火戸のうち少なくとも1、2、4階は閉鎖されていなかったと考えられる。（4階の防火戸はくさびにより開放状態に固定） 無届による増築で吹き抜け部分の防火区画が不備であった。

防火管理及び自衛消防活動上の問題点等

1　非常ベルや異臭を感じていながら通報が遅れ、初期消火や避難誘導が行われず火災発生時の初動体制が不適切であった。

2　防火戸が閉まっておらず、無届による増築等で防火区画も形成されていなかったため、1階で発生した火災の煙が一気に上の階に広がったとみられる。

3　防火管理者の選任、消防計画の届出はされていたが、防火教育、訓練等が形骸化していた。

対　策

1　火事を出さない
- 火災発生危険を洗い出し定期的に点検
- 職場ぐるみで防火意識を高める

2　消防用設備等の維持管理
- イザというとき適正に作動するよう点検を
- 機能的な点検は、資格を持った設備業者等に依頼を

3　防火管理のあり方は
- 消防訓練は、最悪を想定し、実施後は検証して次回に活かす
- 夜間想定や新人教育など弱点を重点に、身につくまで繰り返し訓練を

4　設備の強化
- 人員不足を補うには設備面を強化（消防設備、防火区画）
- じゅうたん、カーテンなど防炎物品のほか、寝具やパジャマの防炎化も有効

まとめ

火災による被害を最小限にするには、早い発見、早い通報、そして早い避難誘導が不可欠です。

火事を起こさないことが第一ですが、どの事業所にも火災危険があることを再認識し、季節や時間帯など様々な想定で繰り返し訓練をしましょう。

また、他の施設で起こった火災事例を他人事にせず、事例を研究し、自らの事業所の防火対策に活かすことが有効です。各消防署所、消防用設備等の業者さんとも連携し、火災による犠牲者を出さないよう努めましょう。

趣味をもとう

No.10

『いま、切手が面白い
―「たかが切手、されど切手」―』

東北メディカル学院
齊　藤　　浩

現代社会はITの進歩により、手紙を書き封筒に切手を貼って投函することが稀になっています。そのため、切手に関する話題を巷で聞くことがありません。唯一あるとすれば、昨年3月にオープンした東京駅丸の内側に完成した旧東京中央郵便局の局舎を保存再生した商業施設「KITTE（キッテ）」でしょうか。

私の切手収集は、小学校3年生頃に始まります。当時は切手ブームだったのか、クラスの話題は新しく発行される切手のことでした。仲間と切手の物々交換や小遣いを貯めては新しい切手を買いに行ったものでした。もちろん単品（1枚）です。また、週刊少年マガジンと週刊少年サンデーからも収集方法の情報を得ていました。その頃、最も欲しかった切手は「見返り美人」と「月に雁」で小学生にとっては夢のまた夢の切手でした。日本切手が収集の中心でしたが、外国の切手、アメリカ占領下の琉球郵政庁の琉球切手にも興味があり、デパートの切手専門コーナーに友達とよく通ったものです。

昭和50年代までは、発行数が少なかったようで、何人もの人がその日に発行される切手を求め朝早くから郵便局に列を作ったものでしたが、郵政省から日本郵政に組織変更されてからは毎月多くの切手が発行され、今は予約購入し郵便局に足を運ぶことが少なくなりました。

切手の魅力は、その時代にタイムスリップさせてくれることです。例えば、1964年の東京オリンピック、1972年の札幌冬季オリンピック、1998年の長野冬季オリンピックの記念切手を見ると、日本選手の活躍の場面が甦ります。また、色彩やデザインが駆使された切手は小さな世界の芸術であり、時代の宝です。

宝といえば、郵便局から購入できない特殊な切手があります。その代表的なものは、お年玉付年賀はがきの3等の「お年玉切手シート」があります。毎年の当選番号の下2桁（100枚の年賀はがきにつき2枚の確率）がとても気になるところです。もう一つ、もっと稀少なものが、かもめ～る（くじ付き暑中・残暑見舞いはがき）のB賞の切手シート（下3桁、1000枚のはがきに2枚の確率）です。

発行される切手の種類は、普通切手（前島密の1円切手などの通常切手）、記念切手、特殊切手（年賀切手やシリーズ切手）、寄付金付切手があります。過去には航空切手、電信切手などが存在したようです。今は切手の形状も変化し一般的な長方形のものだけではなく、丸い形をしたもの、ハートの形をしたもの、キャラクターを象ったもの等、とても個性的なデザインの切手が発行されています。また、シールのように剥がして直に使用できる機能的な切手もあり、日々進化をしています。―「たかが切手、されど切手」―なんです。

余談になりますが、小学生の息子は父親の「収集DNA」をしっかりと受け継ぎ、今は観光地のコインとスーベニアメダルの収集に熱中しています。いつの日か、切手収集に目覚めてくれることを密かに願っております。

会員事業所紹介コーナー⑩

株式会社　柏　崎　組

所在地：青森県上北郡おいらせ町立蛇７１
TEL:0178(50)6511
Kハウス：
http://www2.kashiwazakigumi.co.jp/index.html
株式会社 柏崎組：
http://www.kashiwazakigumi.co.jp/

弊社は明治３６年に創立しました建設業者であります。お陰様をもちまして昨年１０月に創業１１０周年を迎えることができました。これまで携わってきた方々に感謝するとともに、これからも地域の方々から愛され必要とされる会社を目指します。

主に道路、河川、橋梁、鉄道、小中学校、公園などの官公庁発注工事がほとんどですが、北海道の寒い地域から生まれたＦＰ工法による一般住宅も手がけております。①熱や冷気を伝えにくい②地震に強い③水に強い④内部結露が無い⑤騒音に強い等の特徴があります。東日本大震災時においては岩手県山田町の「津波に耐えぬいた家」として高い評価を得るとともに、快適住宅のテレビ番組にも取り上げられるなどしております。新築・リフォームを考えている方は一度　「㈱柏崎組　Ｋハウス」のホームページをご覧下さい。

また、国・県とは防災協定を結び台風、大雨、地震等の災害時への協力、おいらせ町とは消防団協力事業所として、団員が勤務中でも災害現場へ出動できる環境を整え、地域社会へ貢献できる態勢をとっております。

地域に根ざして１１０年という歴史の中から生まれた信用、知識、技術力に更なる磨きをかけ邁進してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。